

# 冰心の描いた女性像

姜 波\*<sup>1</sup>

## 要 約

本論文は社会問題及び女性問題の観点から、中国の女性作家冰心の文学作品に登場した女性像を分析し、次のような問題を明らかにしたものである。第一は封建王朝が崩壊する激しい社会変動の中で、冰心は自我に目覚め、個人の主義主張を持ち、教養のある新しい良妻賢母を賛美する点である。その意義は服従することを女性の美德とする旧因習への挑戦であった。第二は女性の悲劇をもって社会の目醒め、女性の目醒めを促し、文学という独特な方法で社会改革を呼びかけることであった。本論文は冰心の研究のために新たな展開を示している。

## はじめに

五四運動は暗黒の旧社会に嵐のように大きな衝撃を与えた。社会改革の高波が押し寄せる中、冰心も他の知識女性と同じように旧道徳、旧習慣を打ち破り、新しい人生を探求する道を歩み、「現実の目で人生の問題、民族の問題」<sup>1)</sup>を探求する文筆活動を始めた。

それは冰心の初期の作品における特徴の一つとして見落とすことはできない。しかし、上記のような視点だけでは冰心の全体像が見えないため、私は社会問題、女性問題の観点から冰心の作品『二つの家庭』、『わかれ』、『夫人の応接間』、『西風』に登場する女性像に視点を置き、冰心はどのような女性を理想としていたのか、どのように「賢妻良母」をとらえていたのか、冰心の女性観は中国の女性解放のためにどのような役割を果たしたのかといった問題を取り上げ、時代背景を見ながら冰心の女性像を分析したいと思う。

### 1. 冰心の理想とした良妻賢母の女性像

『二つの家庭』<sup>2)</sup>は1919年9月『晨报』に連載された謝冰心のデビュー作である。「私」という女性の鋭い目で二つの家庭を、厳密に言うと二人の全く違うタイプの女性を対照的にとらえ、それぞれの家庭の悲喜劇を巧妙に展開した短編小説である。

二つの家庭は、いずれも旧家庭の抑圧から脱出し、近代社会が生んだ核家族であった。しかし、陳華民の家庭は、陳夫人の怠慢により夫婦間の愛情や子供

への愛、親子の絆といったものは感じられず、無秩序な状態が続き、陳先生の死によってばらばらになってしまう。一方、陳家とは対照的に峻歌の家庭は亜茜夫人の勤勉さとやさしさで春のような暖かい雰囲気、夫婦の愛、親子の愛に満ちた幸せの溢れる家庭であった。

このような家庭の形成には、それぞれの妻が重要な役割を担っている。陳夫人は三人の子どもをそれぞれ保母に任せっきりで、毎日濃い化粧をし着飾って友人とマージャンに明け暮れ妻として母としての役割を果たしていなかった。夫の不満に対して彼女は「女権を尊重しない」、「不平等だ」、「自由がない」<sup>3)</sup>と反発して聞こうとしないのみならず、自分の行為を正当化にしようとする。このように陳夫人は悪妻のイメージが強く、家庭の破滅を招く重要な原因となっている。

陳先生は家に帰っても妻の不在、子どもたちの泣き声など無秩序な状態に不快な気持ちが募るばかりであった。彼は家庭内の不満から逃避しようとして飲み屋が閉店するまで飲み続けた。苦悩が続き、不摂生のためにとうとう結核におかされて亡くなる。その後陳夫人は家を売り払って南国に帰ってしまうのである。作者は陳夫人のことを作品の中で「人には親切だが、まだ若いために遊興にふけり、家事を怠けている」と批判している。これは女性解放の意味をはきちがえ、妻と母の役割を果たさなかった女性に対する「私」の見方ではあるが、社会一般の見方をも反映したものにもなっている。

陳夫人を描いた作者の意図は、誤って理解された

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
(連絡先) 姜 波 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

「女性解放」は真の幸福をもたらさず、かえって家庭を悲劇に導くということを訴えることにあった。同時に作品を通して「女性解放」の真の意味を誤解しないように世の中に、警鐘を鳴らすことでもあった。

当時『新青年』、『新潮』、『婦人雑誌』などの影響のある雑誌では女性のあり方、女性の個性確立といった問題に関する議論が盛んに行われていた。これらの問題は当時まだ女子学生だった冰心にとって、大いに関心を寄せる問題であったに相違ない。したがって『二つの家庭』のような小説を書くに至った動機はここにあると言える。

冰心はこれらの雑誌に載せられた評論や主張のように正面から女性問題を論じるのではなく、文学という手法で陳夫人のような女性を作品にとりあげ、誤解された「女性解放」を正そうとしたのである。陳夫人のように女性解放を正しく理解しないと、家庭の崩壊をもたらしてしまうことがあり得ることを示し、女性解放を正確に認識する必要性を訴えた。

## 2. 冰心の理想とした女子と教育

1919年前後『新青年』、『少年中国』などの雑誌には、日本、アメリカ、ヨーロッパなどの国々の女子問題や教育に関する学説が盛んに紹介されていた。有識者が当時の中国の女子教育制度に存在する問題を指摘し、国内の女子教育の実情と関連させながら女子教育の問題を誌上で検討していた。そこで父、夫、子に従うということを強調する儒教的良妻賢母主義教育を否定する一方、夫を助け、子を教えるという近代国家と近代家族が求める良妻賢母主義教育、女性の個性解放、女性の自立する能力を養う女子教育を提唱する動きが活発になってくる。

中国では女子のための学校教育制度を設けるための法令は1907年に公布された。清朝末期の女子教育制度は日本の女子教育制度を踏襲した部分が多く<sup>4)</sup>、日本は天皇制を柱とする立憲君主制のもとに近代の産物である国家主義の価値観と近代以後も儒教的倫理道徳観が共に要求されたために、その女子教育制度も国家主義と封建主義の色彩が濃厚であった。しかし中華民国が誕生すると、蔡元培が初代の教育総長に就任し、教育制度の改革に取り込んだ。彼は清政府の「忠君」「尊孔」を主旨とした教育方針を撤廃し、ヨーロッパの科学教育を受け入れ、旧学制を大きく改革し、「壬子癸丑学制」<sup>5)</sup>を制定した。この新しい教育制度はフランス革命の宣揚した「自由」、「平等」、「博愛」の思想を重視したもので、これは後の反封建教育運動の礎となった。彼によれば「良妻は夫を良い夫に、賢母は子女を良い子女にする」、したがって女子教育は良妻賢母主義教育を実施すべき

ものであった。「教育は学生の健全な人格を養成しなければならない」。よって中国の近代家庭が求める良妻賢母教育はこのような主旨に変わっていた。

『中国教会学校史』<sup>6)</sup>によると「燕京大学の教育精神はブルジョアの民主、自由、平等、博愛をもとにして、中国の旧教育の伝統を否定していた」とある。1923年燕大は教会学校において家政学専攻という新しい講座を開設した。その目的は社会人、教育者及び良好な教育を受けた主婦を養成することであった。そこで講じられる育児、栄養学、衛生学、家事などの科目はいずれも中国の生活事情に必要なものである。このような大学で学んだ女性たちは、「良き母良き妻」の標準を頭に刻み込んでいたのである。冰心の理想とした女性像は、そこから形づくられたと考えられる。すなわち、冰心は、キリスト教系の医学系女子大学に学び、西洋流の教育を受けていたため、亜西夫人のような良妻賢母を理想としていた。その良妻賢母はもはや従来の父、夫、子に従うという封建的「三従」道徳を持つ人間ではなく、夫婦が敬愛しあい、「子を教え、夫を助ける」良妻賢母に一新した人間である。この考えは冰心の学んだ燕京大学の教育精神によるものであった。

女性がよき妻、よき母になるためには十分な教育を受けなければならないと冰心は考え、陳婦人が家庭を悲劇に至らせた原因を教育を受けなかったことに帰着させた。冰心は『最後の安息』においても作者は嫁を虐待する姑について「地方での教育の遅れは翠児の義母のような残虐な女性が出てくる原因なのだ<sup>7)</sup>」と教育を受けなかった弊害も指摘していた。

冰心の推賞する新しい女性をさらに見てみよう。『夫人の応接間』(1933)には、文学教授・哲学者・政治家・詩人・画家・医師などエリートが活動するサロンの中心人物として、世の中の最新の話題を討論する博学多才な「夫人」が登場する。E.E.Cummingsの詩、Aldous Huxleyの小説を読み、女権論、婦人論を論じるその「夫人」は、「女だからと言って本を読んだり、子守をしたりして一生を終わらせたくない<sup>8)</sup>」と従来の女性の人生観を否定する。裕福な銀行家の「夫人」である彼女は子どもの教育に熱心で夫への思いやりもあり、また男性に劣らないほどの教養があり、社交にも積極的であった。

「夫人」のように充実して幸せな生活ができたのはよい教育を受けたからである。ここで冰心は、陳夫人のような学校教育を受けない女は墮落し、着実に良妻賢母教育を受けた女性が幸福になるという結論にたどり着く。そして、冰心は教育こそが人々の人生を幸福に導く重要なものだと考えているため、子どもの教育の重要性をよく強調する。

『わかれ』(1933)にはそのような特徴が顕著に現れている。この作品について研究者卓如は「作者は貧富の差の大きさを対照的にとらえることにより不公平な社会に対する憤懣を表し、裕福な生活を批判し、労働者を賛美する」<sup>9)</sup>と論評し、また茅盾は『わかれ』を書いた冰心のことを「強い正義感に富んでいる」<sup>10)</sup>と賞賛した。この点については筆者もまた同意するが、本論文ではさらに作者の教育への熱意、夫婦平等の視点から『わかれ』を再発見し論じたいと思う。

若い知識人の夫婦が、生まれたばかりの子どもを見ながらこんな会話をかわす。

父親はベッドの縁に腰を掛け、母親の手をそっと取り「これから寂しい思いをしなくてもいいよ。僕が学校から帰ったらお前の手伝いをしてこの子と一緒に遊んでやろう。休みの時には、この子を連れて山や海へ遊びに行こう。この子をなんとしても元気に育てなくちゃ……」と言った。

母親はうなずきながら「そうね、早く音楽、絵画を勉強させなければ……私は何もできないので、充実した生活にいつも何かもの足りない感じがします」と言った。

父親は笑って「おまえ、将来この子を何「家」にしたいのかね？ 文学家？ 音楽家？」

「男の子だから、今中国は科学が必要だから、科学者が一番いいかもしれない」

「わたしらはこの子のために教育費を積み立ててやらないといけない。今から用意しておくにこしたことはないからな」……<sup>11)</sup>というように若い夫婦の和やかな会話からも、子どもに対する熱心な教育態度を窺え、夫婦が相互に思いやり、平等な立場にたって子供の教育を計画していたことも分かる。そこからは敬愛しあい平等に生活を営んでいる暖かい家庭のムードが伝わってくる。教師をしていた冰心は長男を出産した後に、この小説を書いた。彼女の家庭や、子どもの教育に対する真摯な態度が行間に溢れている。

中国では最後の王朝が崩壊し、封建的共同体が解体あるいは衰退する方向に向かい、近代社会へ移行しつつあることが、人々の生き方に変化をもたらした。自由競争の近代社会において生き延びるために、自立するために教育が絶対に必要となったのであった。子どもの成長をめぐる家族や社会の側からの事態への対応が教育への関心に結びついたのである。冰心の作品を通じて当時の中国における中産階級の家及びそれらの教育を重視する風潮がかなり強かったことがうかがえる。

### 3. 封建家庭に対する反抗意識

冰心の「問題小説は封建社会に反逆する特徴がある」<sup>12)</sup>と論じる研究者もいる。その点についてはもう贅言を費やすまでもない。

旧社会・家庭は人間の個性を無視し自由を束縛し服従を強要する。一方、近代社会では人間は個性を尊重し、自由を求めるようになる。五四時期に至って青年たちは人間性に目覚め封建主義の抑圧に悩み反発し自由で明るい人生を切り開くために抑圧される暗い家から出て行く。

作家巴金は『家』(1929)において、家族の抑圧に耐え忍び、恋人、妻を失ってしまういわば家族の犠牲となる長男と、家族の束縛から脱却し自由を求めて新しい人生を切り開く二男、三男の悲喜劇を展開した。しかし冰心の作品におけるその反逆精神はどうだろうか。いくつかの作品をあげてみる。

『秋風秋雨に愁い』(1919)に登場した淑平、英雲、冰心はクラスメートである。それぞれが理想にあふれる女子中学生でありながら、理想を目指して勉強に勤しむ。しかし淑平は無理をして病死してしまった。将来大学に入る夢を抱く英雲は卒業する前の夏休みに親の意向で裕福な従兄弟と結婚させられてしまう。封建的結婚制度によって夢が泡となってきた英雲は旧家族での無為な生活を嫌って限りない悩みに陥る。しかし、彼女は今の苦境から脱出することを考えず、生きる屍となる覚悟をして冰心に手紙を寄越す。「……淑平は死にました。私は生きてはいるけれども死んだのと同じです。今となってはあなただけが元気に生きています。私と淑平の理想と希望はあなたに託すしかありません。ぜひ頑張ってください。あなたのように幸運に恵まれる人はそうはいないと思います。私たちの「自分を犠牲にして社会に奉仕する」という目的を決して忘れてはいけません」<sup>13)</sup>。英雲は親の決めた結婚に対して不満な気持ちを抱くものの反対もしなかったし、反発もしなかった。できたのはこのような「悩む」ことだけであった。

このような結末は『あわれこの身の朽果つる』にも見られる。学生運動に参加した穎銘、穎石は父に呼び戻され外出を禁止された。父親は封建的社會を維持する保守派を代表するが、息子たちは反封建主義で革命に熱意を持つ新時代の青年を代表する。二つの世代の対立は五四時期の社会の一面を反映しているが、青年たちは最後まで父親の監禁を打ち破ることができず、嘆くばかりであった。

上に挙げた登場人物はいずれも封建社会、封建家庭の圧迫を受けるが、その圧迫に対して勇ましく戦うことがなく、悩みや憂鬱に始終する悲劇を演出す

るのである。冰心はどのようにこのような悲劇を描かなければならなかったのだろうか。これについて冰心は「私の小説はどのようにして悲観的なのでしょうか」<sup>14)</sup>の中で理由を述べた。「小説を書く目的は社会の共鳴を呼び起こすためなのです。そのために旧社会、旧家庭の弊害を最大限に取り上げ、それによって人々の目覚めを呼び醒ますのです。目覚めれば社会改良を考えるようになります。痛切な悲劇でなければ人々の注意を引き起こせないのです。一方注意を引き起こせなければ人々は社会改良を考えることがないでしょう。ましてや旧社会、旧家庭の中に数多くある事実のほうが私の書いたものより何十倍も悲惨です。「悲劇」をもって「改良」を呼び起こすことは私の小説の目的で、消極的な悲劇をもって積極的な効果をもたらしたいのです」。

冰心はこのような目的で青年たちの悲劇を哀愁をこめて描き、それを通じて旧社会、家庭の弊害の深刻さをリアルに描き出し、女性解放、個の解放の必要性の提起をしたのである。当時では冰心の作品は社会改革のために大いに役割を果たしていた。

中国の近代史の観点から見ても女性解放運動は常に女性の不幸をバネにして展開される特徴があると言える。女性の不幸は社会の反響を呼び起こし、広く社会的に議論されることによって、女性解放の道が探求されるのである。冰心は文学という手段で女性たちの悲劇を取り上げ、社会の目覚めを促していたのである。

## 結 び

冰心の崇拜した「良妻賢母」の理想像は、従来の三従四徳にとらわれた服従を使命とする女性ではなく、自我に目覚め、個人の主義主張を持ち、夫婦が敬愛あい、子どもの教育が立派にできる女性である。

しかしそれらの女性は生活の手段を持たないため、依然として男に依存する立場にいる。冰心の描いた経済的自立を求めようとしない女主人公たちは自立する意欲が欠如している。それは当時の社会条件、経済状況が女性を個人としてその能力によって受け入れるまでには至っていないためであり、冰心の中産階級という出身にも原因がある。当時の知識女性は結婚して妻となり母となるのが普通だと考えていて、自立していこうという意欲が日本、アメリカの女性ほど強くなかったと言えよう。

しかし中国の女性作家の中には冰心と対照的に家庭内に制限された人生を退屈に思い、「良妻賢母」に反発する女性作家もあった。それは廬隱である。廬隱は『勝利之後』<sup>15)</sup>において女子師範を卒業した主人公沁芝を取り上げた。沁芝は革命の嵐の中で恋

愛結婚をし、いわば封建家庭から解放された女性であった。しかし個の確立のゴールにたどり着いた彼女は、平凡で味気ない日常を虚しく感じる。沁芝は無為で退屈な人生に耐えられず、静まり返った家の中でこれからの人生を考える。「人生という大問題が結婚することによって解決するのか。いや人間は決してそんなに単純ではない。もっとすべきことがあるはずだ!」。「家事を切り盛りすることもしなければならぬが、それが結婚した女性の唯一の責任であることは、従来の考えでは極く自然だと思われていたかもしれない。でも私はとてもこのままでは一生を終わらせるわけにはいかない。女性はただ家事のためだけに生まれてきたのではない」と従来の女性の人生観、すなわち女性が家事で一生を終わらせることを否定した。

この種類の作品は五四運動当時の中産階級の女性の精神状態を表している。女性たちは、高等教育を受けても、社会に何の貢献もできず無為で空虚な人生を嘆くと共に、押しつけられた良妻賢母としての生き方に疑問を持ち、否定しはじめた。しかし、現実に向かってどうすればよいかはまったく見当がつかない。彼女たちは家庭に閉じ込められた人生に対して反発する自覚はあったが、日本の女性平塚らいてうたちのように自覚をもって奮起し、社会制度、良妻賢母主義教育を批判する運動を起こせなかった。その障害となったものは彼女たちが突破できない社会的壁である。

近代工業の発展は、女性労働者をつくりだしたが、広範囲の職業のほとんどは女性に開放されなかった。そのため女性たちは、経済の自立を得ようにもその途がなかったのである。さらに、職業を持つ女性への偏見が存在するために、高等教育を受けた女性は社会に受け入れられず、彼女たちも従来の女性と同じように「家の中」にしか居場所がなかった。

冰心と廬隱の描いた女性像はそれぞれ違った特徴があるけれども、どちらも当時の女性が直面した現実的な問題を提起している。それは女性解放運動の過程において不可欠なプロセスである。というのは問題が取り上げられるとそれを解決しようとして有識者たちが議論し、問題の打開策を探るからである。

女性解放を実現させるには、女性の自立と社会に出る力を養う教育が必要不可欠な問題だとだんだんと社会に理解される。その結果、女性の社会参加を提唱し、「女子の地位は、つねに経済の変化によって変わっていく、女子も「人」である以上、生産者となるべきだ」<sup>16)</sup>と主張する人が現れ、そのためにまず家夫長制の束縛を打破すべきだと主張する人も出てきたのである。

家夫長制の拘束とは、女性の家庭外の活動には夫の承認が必要であること、女性が無限責任を負う行為を行う場合、代理人またはその夫の捺印が必要であることという不合理な法律上の規定である。それに対して「私法上の夫婦関係、親子関係、相続権、財産権、自由権などは、男女平等の原則に基づいて大幅に修正」<sup>17)</sup>せよと北京女子高等師範の学生周敏たちが力説した。

このように世論は女性の経済的自立を重視し、それを妨げる社会の不合理を批判するだけでなく、女性の自立への実現に向けて方法を考え出し、社会に呼びかけている。そのような動きは大勢の女性に平凡な生活から抜け出す勇気を与えたに違いない。

近代社会において、封建思想の抑圧から解放された女性が、どういう姿であるべきかは社会にとって

も、家庭にとっても探求する価値のある問題である。都市においては、封建的家族を離れて夫婦を中心とした核家族がだんだんと増え、近代社会に一步踏み込んだ近代家庭がどうあるべきかが注目される中で、冰心は女性としていち早くこの問題に視点を据え、短篇小说『二つの家庭』を書き、「良妻賢母」を賛美し、「悪妻愚母」を非難した。

当時盛んに議論が交わされ、検討されていた女子教育、女性解放及び青年の愛国心などの問題を文学作品に盛り込んだことは社会の目醒め、女性の目覚めを促し現実的な意義があった。

しかし、文学の立場からいえば、このような問題小説は、社会問題にこだわりすぎているため、観念小説としての側面が強調されるあまり、芸術性が必ずしも高いとは言えないものである。

## 文 献

- 1) 茅盾 (1934) 冰心論. 茅盾全集, 20巻.
- 2) 冰心 (1919) 兩個家庭. 原載晨報.
- 3) 『冰心』(1983) 生活・読書・新知三聯書店出版.
- 4) 拙稿 (1997) 日中両国における近代女子教育. 岡山大学紀要, 3, p3.
- 5) 朱有献 (1987) 中国近代教育史料集. 上海教育出版社, p596.
- 6) 高時良 (1994) 中国教会学校史. 湖南教育出版社, p126.
- 7) 冰心 (1981) 最後の安息. 冰心文集 1, 上海文芸出版社, p39.
- 8) 冰心 (1981) 太太的客厅. 冰心文集 1, 上海文芸出版社, p286.
- 9) 卓如 (1981) 漫談冰心的創作. 冰心 (1983). 生活・読書・新知三聯書店. p240.
- 10) 茅盾 (1934) 冰心論. 茅盾全集, 20巻.
- 11) 冰心 (1981) 分. 冰心文集 1, 上海文芸出版社, p241.
- 12) 劉冠軍 (1996) 冰心的問題小説的題材及現實意義. 遼寧大学学报, 2期.
- 13) 冰心 (1981) 秋風秋雨愁殺人. 冰心文集 1, 上海文芸出版社, p421.
- 14) 冰心 (1919) 我做小説. 何嘗悲觀味呢? 記事珠 (1982) 人民文学出版社, p243.
- 15) 勝利之後 (1927) 中国女性作家小説選集 (1981) 所収. 江蘇人民出版社.
- 16) 李達 (1919) 女子解放論. 解放与改造, 1.
- 17) 劉巨才 (1985) 中国女性運動史. 中国婦女出版.

(平成11年11月10日受理)

## A New Type of Chinese Women in Bing Xin's Novels

Jiang Bo

(Accepted Nov. 10, 1999)

Key words : EARLY20CENTURY, NEW WOMEN, WOMEN'S AWAKENING, SOCIAL REFORM, BING XIN

### Abstract

This thesis analyzes Chinese women described by Bing Xin, a female writer, in her short novels from social and feminine perspective. As the result, two points are clarified as follows.

One is on a new type of woman living in social cataclysm at the end of feudal days. Bing Xin appreciated a well cultivated woman who was awakened to her ego and had her own opinions, while still being a good wife and wise mother. Bing Xin challenged the old-fashioned conventional society in which women were expected to be obedient as a part of their virtue. The other point is that Bing Xin intended to awaken women's consciousness in order to promote a social revolution by showing women's tragedies in her novels. With such a discussion, this thesis may give a new understanding of the writings of Bing Xin.

Correspondence to : Jiang Bo

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.9, No.2, 1999 149-154)